

抑うつ的認知の歪みが攻撃性を促進するメカニズムについて

－共感性の影響を踏まえて－

川端 壮康*・大渕 憲一**

The Effect of Cognitive Distortions in Depression Enhancing Aggression: The Role of Empathy

Takeyasu Kawabata・Ken-ichi Ohbuchi

本研究では、抑うつ的認知の歪みが、攻撃性に影響を与えるメカニズムについて、両変数への共感性の影響を踏まえて検討した。大学生216名に対し、抑うつ的認知の歪み、攻撃性、共感性を測定する質問紙調査を実施した。抑うつ的認知の歪みの下位尺度としては、自信欠如尺度と対人的過敏さ尺度が、攻撃性の下位尺度としては、言語的攻撃尺度、関係性攻撃尺度、身体的攻撃尺度がそれぞれ得られた。共感性の下位尺度としては、Davisの多次元共感性測定尺度の、視点取得、共感的配慮、個人的苦悩を用いた。その結果、①抑うつ的認知の対人的過敏さが身体的攻撃を促進すること、②情動的共感性の一つである共感的配慮は自信欠如を抑制するとともに、すべてのタイプの攻撃性を抑制すること、③情動的共感性の一つである個人的苦悩は抑うつ的認知の歪みを促進するとともに、関係性攻撃を促進することが明らかになった。

Key Words : Depression, Cognitive Distortion, Aggression, Empathy

問題と目的

攻撃性と抑うつ

抑うつと攻撃性は、一方は意欲の減退などを主症状とし、他方は他者に意図的に危害を加えることであるというように、一見正反対の反応にも見えるが、両者には密接な関連があることが、これまで指摘されてきている。

例えば、Gibbs (1993) は、反社会的な若者は自己中心性、他者非難、ミスラベリング mislabelling (反社会的な行動を好ましいものとみなすこと) 等の認知の歪みが強く、そして、そのような認知傾向が高い青年ほど非

行傾向や抑うつ不安傾向、引きこもり傾向が高いことを指摘している。また、抑うつが怒りと結びついていること (Renouf & Harter, 1990)、顕在的な攻撃行動と結びついていること (Angold & Costello, 1993)、仲間関係を操作することによって相手を傷つける関係性攻撃と結びついていること (Crick & Grotpeter, 1995) も明らかにされている。さらに、抑うつと関係が深いものとして、社会不安が関係性攻撃を促進することも見出されている (Loudin, Loukas, & Robinson, 2003)。

また、怒りを抱きながらもそれを表出しない不表出性攻撃と抑うつの間にも関連が仮定

2015年3月25日受理
* 尚網学院大学 准教授
** 東北大学大学院 教授

されている。例えば、坂井・山崎（2003）では、児童において、不表出性攻撃と抑うつとの関連が高いことが示された。勝間・山崎（2007）では、児童において、不表出性攻撃傾向が高い児童は、低い児童よりも高いネガティブ感情を示した。大学生においても、ストレス、怒り、怒りをコントロールすることなどが抑うつを高めることが報告されている（越智・金澤・坂野、2012）。さらに、敵意や短気が抑うつを高める危険因子であるとか（上野・丹野・石垣、2009）、敵意の高さが抑うつに影響を与えているという知見も得られている（山内・坂野、2006）。また、川端・大淵（2015）は、社会的情報処理モデルの立場から、感情体験及びその表出を制御、修正、管理する感情調節（Cole, Martin, & Dennis, 2004）が、抑うつ感情を高めることを示している。

抑うつの傾向は、なぜ怒りや攻撃行動に結びつくのだろうか。一般に、抑うつを引き起こす原因としては、物事を否定的にとらえる認知の歪みの影響が大きいとされている（大野、2010；Beck, 1976）。具体的には、証拠が少ないのに思いつきを信じ込む「恣意的推論」、良くないことが起こると、自分が悪いんだと何でも自分を責めてしまう「自己関連付け」、物事が曖昧な状態に耐えられず、いつも白黒をつけないと気が済まない「二分思考」、ある事実を取り上げて、他も同様と決めつけてしまう「極端な一般化」などがある（大野、2010）。

また、抑うつ者の情報処理の否定的な偏りは、何らかの形で自己に関連する場合により顕著になることや（大平、2005）、うつ気分を持続する人は、気分の落ち込みや状況に対して、自分自身に注意を向ける方向で反応しやすいことも見出されている（Lyubomirsky & Nolen-Hoeksema, 1995）。これらをまとめると、攻撃性に関連した抑うつ傾向者の認知的特徴としては、思考の硬さや視野の狭さと、

自己に関する否定的な見方へのとらわれが挙げられよう。

このような抑うつの認知の歪みが攻撃行動へと結びつくメカニズムについて、Quiggle, Garber, Panak & Dodge（1992）は、社会的情報処理理論の立場から、攻撃的児童と抑うつの児童を比較し、前者と同じく、後者も他者に敵意を帰属しやすいが、これを自らの欠点や失敗と関係させて認知することを見出した。また、彼らは、抑うつの児童と、抑うつの児童と、抑うつの児童を比較し、前者は後者と比較してアサーティブな反応をとりやすく、そうした行動が良い結果を招かないと考えやすいことも明らかにされている。また、AgostonとRudolph（2013）は、抑うつに伴う苛立ちが攻撃反応を促進すること、抑うつが相手への敵意帰属を伴うため、他者とのかかわりを誤って解釈させ、攻撃的反応を誘発すると論じている。これらの研究から、抑うつ者の認知的歪みが、周囲への敵意の帰属を生み出し、それに伴って怒り感情が喚起されることが攻撃行動を引き起こすと考えられる。

近年、研究者たちは、攻撃行動の形態や発生メカニズムの違いから、反応的攻撃（reactive aggression）と能動的攻撃（proactive aggression）あるいは道具的攻撃（instrumental aggression）を区別して扱うことが多い。反応的攻撃とは、欲求不満、目標追求の阻止、迫り来る脅威などの刺激によって生じた否定的感情を表出しつつ、嫌悪感の源となる対象に危害を加えて、自分を守ろうとする攻撃である。一方、能動的攻撃あるいは道具的攻撃は、外的な報酬（食物、道具、金銭、名声、地位など）を得るためや、何らかの負の事態（他人から不愉快な扱いを受ける、など）を取り除くための手段として行われる攻撃で、否定的な感情表出が伴うとは限らない（濱口、2002；Dodge & Coie, 1987）。さらに、坂井・山崎（2004a, 2004b）は、反応的攻撃を表出

性攻撃あるいは外顕性攻撃 (expressive aggression) と不表出性攻撃 (inexpressive aggression) に分け、能動的攻撃あるいは道具的攻撃を、反応的要素をより含まない、仲間関係を操作することによって相手を傷つける攻撃である関係性攻撃 (relational aggression) (Crick & Grotpeter, 1995) によって代表させることを提唱している。このように、攻撃性には様々なタイプがあることを考慮すると、抑うつとの関連についてもタイプによってメカニズムに違いがあると仮定する必要があるであろう。

共感性と攻撃性及び抑うつ

攻撃性と抑うつとの両方に関係する個人特性の一つに、共感性がある。ここで共感性は、Davis (1994) によれば、他者の経験に対する個人の反応と関係する一連の構成物と定義され、情緒的要素と認知的要素から成る多次元構成体であるとされる。Davis (1980) は、共感性の個人差を多次元的に測定するための質問紙尺度「対人的反応性指標」(Interpersonal Reactivity Index : IRI) を開発した。IRI は、自発的に他人の心理的立場をとる傾向である視点取得 (Perspective Taking : PT)、想像力を用いて、自らを、小説、映画、劇の架空の登場人物の感情や行動に置き換えるファンタジー (Fantasy : FS) という二つの認知的要素を測定する下位尺度と、不幸な他者への、同情や配慮 (concern) といった他者志向の情緒である「共感性的配慮」(Empathic Concern : EC) と、緊張する対人状況での個人的な不安や心配などの自己志向な感情である個人的苦悩 (Personal Distress : PD) という二つの情緒的要素を測定する下位尺度から構成されている。

共感性全般は、一般に、攻撃行動を抑制する要因と考えられ、両者の関係について多くの研究がなされている。矛盾した結果も示されているものの、おおむね共感性は攻撃性を

抑制することが示されてきた。Jolliffe & Farrington (2004) は、メタ・アナリシスの結果、認知的共感性は情緒的共感性よりも、より強い負の相関が攻撃行動との間にあることを明らかにしている。しかし同時に、使用される心理尺度によって、共感性と攻撃行動との相関の強度は変わるという問題が見られた。また、共感性と犯罪との関係については、青年の方が成人よりも強い負の関係を示し、暴力的犯罪者ではより強い負の関係が見られた。Miller & Eisenberg (1988) によれば、メタ・アナリシスの結果、質問紙によって測定された場合、共感性は攻撃性や反社会的行動と負の相関が見られたが、他の方法によって測定された場合は、負の相関は見られなかった。Carlo, Raffaelli, Laible, & Meyer (1999) は、青年期初期の少女・少年において、共感的配慮と視点取得からなる同情 (Sympathy) が身体的攻撃行動の表出を減少させることを示している。Mehrabian (1997) は、大学生において、共感性の情緒的要素が攻撃性や暴力と負の関係にあることを報告している。Beven, O'Brien-Malone, & Hall (2004) は、88名の暴力的犯罪者に、IRIを実施した結果、暴力的犯罪者は、視点取得、共感性的配慮、ファンタジー、個人的苦悩のそれぞれの下位尺度において低い値を示したことを報告している。

一方、共感性は、抑うつとも関連することが明らかにされている。O'Connor, Berry, Weiss, & Guilbert (2002) は、否定的評価に対する恐れ、社会的比較、ねたみに対する恐れといった自己志向的動機付け (Self-oriented motivations) と、共感性や対人的罪悪感といった他者志向的動機付け (Other-oriented motivations) が抑うつに及ぼす影響を検討し、うつ病者は健康な学生よりも、否定的評価に対する恐れや社会的比較といった自己志向的動機づけが高いとともに、対人的罪悪感や共感性の下位尺度の一つである個人的苦悩

(PD) という他者志向的動機づけも高いことを明らかにしている。後者について、特に共感性のように一般には適応的な指標とされるものが抑うつの原因となる理由について、O'Connor et al. (2002) は、臨床的抑うつ者は、自己が他者にとって有害であるとする病理的認知を持っているためとしている。また、Thoma, Zalewski, Reventlow, Norra, Juckel, & Daum (2011) も、同じくうつ病者は健常者と比較して、情緒的共感性の一種である個人的苦悩が高いことを明らかにしており、その理由として、他者の不幸に影響されやすい傾向がうつの傾向をもたらすと推論している。

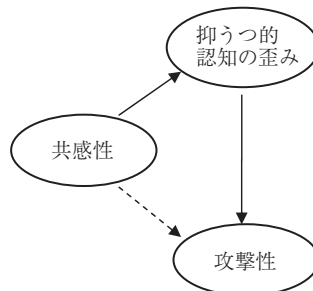
こうした先行研究から、共感性は攻撃性を抑制するとともに、抑うつの認知を促進するが、その効果は共感性のそれぞれの次元によって異なると考えられる。

本研究の目的

以上を踏まえて、本研究の目的は以下のとおりである。

先に述べたように、抑うつの認知の歪みが攻撃性に与える影響において、攻撃性のタイプによってどのような違いが生じるかを検討する。そしてまた、この過程において、共感性の果たす役割を明らかにする。すなわち、共感性は抑うつの認知の歪みを促進するとともに、攻撃性を抑制すると予想されるが、特に、共感的配慮と個人的苦悩が、抑うつの認知の歪みを促進することを通じて攻撃性を高めると同時に、直接的には攻撃性を抑制すると仮定する。

なお、本研究が仮定するモデルは Figure 1 であり、このモデルの妥当性を検討する。



(パスの実線は促進的、破線は抑制的な関係を示す)

Figure 1 本研究で仮定する基本モデル

方 法

調査参加者

東北地方の A 大学の学生 232 名。有効回答 216 名 (男性 63 名、女性 153 名)。平均年齢 19.6 ± 1.1 歳。

手続き

授業中一斉に配布し、回答後、回収した。その際、個人情報には十分に守られること、及

び気分が悪くなったりした場合は、いつでも回答を中止することができることを伝えた。調査を通して、気分の悪化等を訴えた調査参加者はいなかった。

調査内容

多次元共感性測定尺度 Davis (1980: 日本語版、桜井、1988) による本尺度は、「視点取得」、「ファンタジー」、「共感性的配慮」、「個人的苦悩」の 4 つの下位尺度からなる、

共感性を多角的に測定する心理尺度である。下位尺度ごとに6項目ずつ、合計24項目からなる。参加者には、「それぞれの質問について、あなたはどの程度当てはまりますか」と聞き、各項目を1「全然当てはまらない」～5「非常に当てはまる」の5件法で実施した。なお、ファンタジー尺度は、認知傾向を測定するために作成されたにもかかわらず、視点取得尺度よりも共感的配慮尺度との相関が高く、気質的な情動性と関連するとの結果から情動的指標と結論づけられ、その後と研究では使用されないことも多いことから（鈴木・木野、2008；Davis, Hull, Young, & Warren, 1987）、本研究では使用しない。

攻撃性尺度 磯部・菱沼（2007）による本尺度は、「外顕性攻撃」と「関係性攻撃」という二つの下位尺度を持ち、それぞれ、18項目、10項目からなる。参加者には、「それぞれの質問について、あなたはどの程度当てはまりますか」と聞き、各項目を1「全然当てはまらない」～5「非常に当てはまる」の5件法で実施した。

認知的歪曲尺度 岡安（2009）による本尺度は、教育臨床場面でみられる、対人関係における認知の歪みを測定し、それぞれ4項目からなる「自信欠如」、「自己卑下」、「他者配慮」、「他者排除」の下位尺度で構成されている。岡安（2009）は、二分論的志向、過度の一般化、個人化等の抑うつ的認知の歪みを想定して本尺度作成したが、高校生を対象として調査を実施した結果、当初想定した認知の内容によるカテゴリーではなく、抑うつ的認知の対象（自分か他人かなど）が類似した項目同士が集まった上記の下位尺度が抽出された。対人関係場面に特定した認知の歪みは、内容よりも対象の類似性が優先されるという岡安（2009）の仮定に基づき、本研究では上記4尺度を用いることとした。参加者には、「以下の質問について、あなたはどの程度当てはまりますか」と聞き、各項目を1「全然

当てはまらない」～4「よく当てはまる」の4件法で実施した。

結 果

因子分析と尺度の信頼性

IRIについては、どの項目にも天井及び床効果が見られなかったため、原尺度28項目からファンタジーの尺度を除いた21項目に、探索的因子分析を実施した（最尤法、バリマックス回転）。因子負荷量が低かった項目を除外し、3因子構造が確認された（Table 1）。原尺度にしたがい、因子Iを視点取得（5項目）、因子IIを共感的配慮（4項目）、因子IIIを個人的苦悩（6項目）と名付けた。それぞれ、信頼性係数は、視点取得が $\alpha = .71$ 、共感的配慮が $\alpha = .76$ 、個人的苦悩が $\alpha = .78$ であり、十分な値が得られた。

攻撃性尺度について、天井及び床効果が見られた第1項目、第4項目、第5項目、第6項目、第7項目、第25項目、第27項目の合計7項目を除外し、探索的因子分析を実施した（最尤法、プロマックス回転）。因子負荷量が低かった項目を除外し、因子I（7項目）、因子II（3項目）、因子III（4項目）からなる3因子構造を採用した（Table 2）。その内容から、因子Iを「言語的攻撃性」、因子IIを「関係性攻撃性」、因子IIIを「身体的攻撃性」と命名した。それぞれの信頼性係数は、言語的攻撃 $\alpha = .82$ 、関係性攻撃 $\alpha = .67$ 、身体的攻撃 $\alpha = .74$ であり、十分な値が得られた。

認知的歪曲尺度について、どの項目にも天井及び床効果が見られなかったため、原尺度通り16項目に探索的因子分析を実施した（最尤法、プロマックス回転）。因子負荷量が低かった項目を除外し、因子I（7項目）、因子II（3項目からなる）2因子構造を採用した（Table 3）。その内容から、因子Iを「対人的過敏さ」、因子IIを「自己卑下」と命名した。それぞれの信頼性は、対人的過敏さは

$\alpha = .75$ 、自己卑下は $\alpha = .63$ であり、自己卑下の値がやや低いが、その後の検討に耐えるものと考えた。

各尺度の記述統計を Table 4 に、各尺度の間の相関係数を Table 5 に示す。

男女差

男女差を確認するため、各尺度について、平均値の比較を行った (Table 6)。その結果、対人的過敏さ、個人的苦悩、共感的配慮、関係性攻撃のいずれも、女性の方が有意に高かった。

仮説モデルの検討

仮説モデルを検討するため、Amos Ver.20.0 for Windows を用いて、共分散構造分析を行った。Figure 1 の、抑うつ認知の歪みには、対人的過敏さ尺度と自信欠如尺度を、共

感性には、視点取得尺度、共感的配慮尺度、個人的苦悩尺度を用い、攻撃性には、言語的攻撃尺度、関係性攻撃尺度、身体的攻撃尺度のうちの一つを用いて構成した 3 つのモデルを初期モデルとした。Amos の修正指標を参考にパスを加減して最終的に得られたモデルを Figure 2、Figure 3、Figure 4 に示す。共感的配慮から言語的攻撃へのパスが有意傾向 ($P < .10$) であることを除き、その他のパスは全て統計的に有意であった。

初期モデルからの大きな変更点としては、視点取得が 3 タイプの攻撃性のいずれに対しても、有意な関連が見られず、モデルから消失した。モデルの適合度はそれぞれの図に示しているが、言語的攻撃 (Figure 3)、関係性攻撃 (Figure 4)、身体的攻撃 (Figure 5)、いずれのモデルも信頼できるレベルに達した。

Table 1 IRI の因子分析結果

項目内容	I	II	III	
18 緊急時には、どうしてよいか、わからなくなる	.800	-.051	.037	
12 緊張状態になると、ひどくビクビクする	.691	-.028	.013	
4 緊急な状況では、どうしようもなく不安な気持ちになる	.669	.076	.012	
20 緊急事態で、ひどく援助を必要とする人を見ると、とりみだしてしまう方である	.614	-.054	.041	
14 緊急状態でも、比較的うまく対処できる (*)	.573	.084	-.142	
7 感情が高ぶると、無力感に襲われる	.370	.031	.065	
3 困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない (*)	-.012	.797	-.021	
10 周りの人たちが不幸でも、自分は平気でいられる (*)	.003	.774	-.026	
13 不公平な扱いをされている人たちを見ても、あまりかわいそうとは思わない (*)	-.030	.683	.034	
9 傷ついた人を見ても、冷静な方である (*)	.088	.511	-.043	
1 自分よりも不幸な人たちには、やさしくしたいと思う	-.007	.398	.012	
16 どんな問題にも対立する二つの見方 (意見) があると思うので、その両方を考慮するように努める	-.060	-.069	.656	
8 友達をよく理解するために、彼らの立場になって考えようとする	.038	.131	.635	
21 ある人物に気分を悪くされても、その人の立場になってみようとする	-.027	.173	.556	
19 人を批判する前に、もし自分がその人であったならば、どう思うであろうかと考えるようにしている	.033	-.059	.555	
5 何かを決定する時には、自分と反対の意見を持つ人たちの立場にたって考えてみる	.068	-.144	.519	
(*) 逆転項目	I	II	III	
	I	1.000		
	II	-.202	1.000	
	III	-.095	-.186	1.000

Table 2 攻撃性尺度の因子分析結果

項目内容	I	II	III	
13 言い争いをすることがある	.912	.030	-.045	
14 口げんかをする	.907	.004	-.005	
15 面と向かって、相手に皮肉や悪口を言う	.504	-.004	-.009	
18 口では負けない	.473	-.124	-.077	
17 議論していると、つい声が大きくなる	.454	.033	.155	
16 友達の行動が気に入らないときには、相手にそのことをはっきり言う	.444	-.020	-.074	
11 どなられたら、どなり返す	.414	.185	.105	
2 どんな状況でも、暴力は振るわない(*)	-.074	.899	-.053	
3 どんなに腹が立っても、誰かを叩くようなことはしない(*)	.010	.751	-.064	
10 ムカついて、人を叩いたことがある	.058	.496	.195	
26 腹を立てた相手の悪口を、その人がいないところで他の人に話す	-.104	.023	.782	
23 対人関係でムカついたことを、友達に話して憂さ晴らしをする	.064	-.166	.769	
20 気に入らない人について、良くないうわさを聞いたとき、そのうわさを言いふらす	-.048	.202	.464	
21 あまり好きでない人が近づいてきたら、気づかないふりをして、その場から離れる	.008	.000	.374	
* 逆転項目	因子相関行列			
	I	II	III	
	I	1.00	.418	.253
	II	.418	1.00	.063
	III	.253	.063	1.00

Table 3 認知的歪曲尺度の因子分析結果

項目内容	I	II	
6 誰かと喧嘩すると、みんなが自分の敵のように感じる	.728	-.003	
8 友だちの一人に無視されると、みんなに無視されているように感じる	.705	.109	
10 自己中心的な性格だと思われぬように、話し合いの場では発言を控えるべきだ	.598	.062	
9 自分がつまらない人間だと思われぬように、無理して話をするべきだ	.557	-.072	
1 誰かからいやなことを言われたら、一日中そのことばかり気になる	.452	.116	
11 自分と他の人の友だちの数を比べてしまう	.412	.181	
15 周りの人が心配するといけないので、どんなときでも自分は元気であるべきだ	.369	-.228	
2 自分はクラスの中で人望がない方だ	-.270	.865	
14 クラスメイトは、私と話していても面白くないと思っているはずだ	.206	.515	
16 自分よりも他の人の方が、友だちとうまくつきあえていると思う	.169	.419	
	因子相関行列		
	I	II	
	I	1.00	.509
	II	.509	1.00

Table 4 各変数の記述統計

	平均値	標準偏差
対人的過敏さ	16.44	3.98
自信欠如	7.95	1.79
個人的苦悩	19.69	4.57
共感的配慮	18.39	3.52
視点取得	17.15	3.32
言語的攻撃	20.16	5.95
関係性攻撃	14.43	3.54
身体的攻撃	6.51	2.15

Table 5 尺度間の相関係数

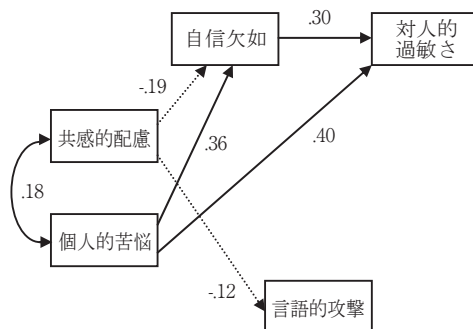
	1	2	3	4	5	6	7
1. 対人的過敏さ							
2. 自信欠如	.427**						
3. 個人的苦惱	.494**	.324**					
4. 共感的配慮	.080	-.125	.183**				
5. 視点取得	.006	-.118	-.041	.137*			
6. 言語的攻撃	.024	.003	-.016	-.117	-.003		
7. 関係性攻撃	.218**	.149*	.203**	-.107	-.086	.188**	
8. 身体的攻撃	.144*	.042	-.046	-.187**	-.045	.163*	-.087

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 6 各変数の男女差

	男性 ($n=63$) 平均 (SD)	女性 ($n=153$) 平均 (SD)	t 値
対人的過敏さ	15.41 4.13	16.86 3.86	-2.46 *
自信欠如	8.13 1.88	7.88 1.76	0.94
個人的苦惱	18.54 4.78	20.16 4.42	-2.39 *
共感的配慮	16.92 3.86	18.99 3.19	-4.07 **
視点取得	16.60 3.58	17.37 3.19	-1.55
言語的攻撃	19.90 5.60	20.27 6.10	-0.41
関係性攻撃	13.21 3.74	14.93 3.33	-3.33 **
身体的攻撃	6.79 2.29	6.49 2.08	1.23

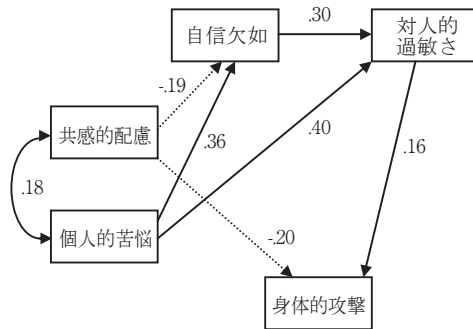
* $p < .05$ ** $p < .01$



$\chi^2(8)=2.27$ $p=.97$ $GFI=1.00$ $AGFI=.99$
 $CFI=1.00$ $RMSEA=.00$ $AIC=46.27$

(実線は促進的パス、破線は抑制的パスを示す)

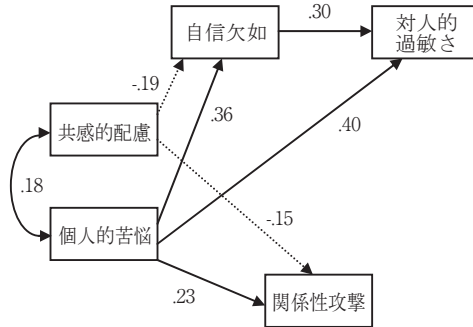
Figure 2 言語的攻撃のパス図



$\chi^2(3)=3.50$ $p=.32$ GFI=.99 AGFI=.97
CFI=1.00 RMSEA=.03 AIC=27.50

(実線は促進的パス、破線は抑制的パスを示す)

Figure 3 身体的攻撃のパス図



$\chi^2(6)=9.87$ $p=.13$ GFI=.99 AGFI=.96
CFI=.99 RMSEA=.04 AIC=57.87

(実線は促進的パス、破線は抑制的パスを示す)

Figure 4 関係性攻撃のパス図

考 察

男女差について

抑うつ的な認知の歪みのうち、対人的な過敏さ、個人的苦悩と共感的配慮という情緒的共感性、および関係性攻撃性について、女性の方が男性よりも高かった。すなわち、女性は男性に比べて、対人面で過敏に反応して落ち込んだりしやすく、また、他者の苦痛に同情したり自分自身が感情を揺さぶられたりする傾向も高く、仲間関係を操作することに

よって相手を傷つける攻撃を行いやすいことが示された。

共感性について、いずれの下位尺度においても女性の方が男性よりも高く、先行研究(登張、2000；登張、2003)と同様の結果が確認された。また、女性の方が関係性攻撃傾向の高いことは欧米における先行研究と同じ結果であり(Crick, 1995；Crick & Grotpeter, 1995, Crick & Werner, 1998)、その傾向が日本人においても確認された。ただし、日本人の児童を対象とした研究では、男女差が見られな

いという知見も得られており（勝間・山崎、2007）、文化による違いや、発達に伴って関係性攻撃の男女差が減少している可能性がある。

抑うつ的な認知の歪みが攻撃性に与える影響について

Figure 3～Figure 5 から、対人的過敏さと自信欠如という抑うつ的な認知の歪みが、言語的攻撃、関係性攻撃、身体的攻撃という 3 種類の攻撃性のそれぞれに対して与える影響について、身体的攻撃に関してのみ、対人的過敏さが攻撃性を促進することが示された。先行研究では、抑うつによって攻撃行動が引き起こされるメカニズムとして、抑うつが怒りや他者に対する敵意の知覚を引き起こしやすくすることを指摘しているが、これはいずれも反応的攻撃を生じさせる要因である（Dodge, 1991）。本研究において取り上げた攻撃性のうち、関係性攻撃は道具的攻撃性から反応的要素を除いたものとされ、反応的攻撃性とは異なる発生のメカニズムを有していると考えられており、これが抑うつ的な認知の歪みが反応的攻撃に影響を及ぼさなかった理由と考えられる。また、言語的攻撃と抑うつ的な認知の歪みとの間に有意な関係が見られなかったことについては、言語的攻撃は、より適応的な指標である高い目標設定と関係し、短気、敵意、自己への攻撃的傾向は、失敗への過敏さと相関があることという知見（齋藤・沢崎・今野、2008）や、自分も相手も大切にしたい自己表現（平木、1993）であるアサーションとの相関が高いという結果（沢崎、2006）から、適応的な側面も多く持つ言語的攻撃は、不適応的な指標である抑うつ的な認知の歪みと関連しなかったと考えられる。

共感性と抑うつ的な認知の歪み及び攻撃性との関係

本研究において、認知的共感性である視点取得は、いずれの攻撃性を取り入れたモデルにおいても有意なパスを持たなかった。これ

は、視点取得が攻撃性を抑制するという先行研究（例えば、川田・田中・杉浦・山田・今野・中島、2007；登張、2000）とは異なる結果である。このことについて、先行研究では児童を対象とするものが多いのに対して本研究の調査対象者が大学生であることの影響や、IRIで測定される他者の視点取得傾向と、この他者の視点取得が活性化されることは、攻撃性に対して異なる効果を持つことから（常岡・高野、2012）、調査参加者の個人特性としての視点取得傾向とは別に、攻撃行動が生起するであろう実際の社会的葛藤場面において視点取得が活性化されるかどうかについて、別の要因が影響していることが想定される。

二つの情動的共感性のうち、個人的苦悩は、抑うつ的な認知の歪みの両方を促進するとともに、関係性攻撃を促進した。一方、共感的配慮は、抑うつ的な認知の歪みの一つである自信欠如を抑制するとともに、関係性攻撃、身体的攻撃、言語的攻撃のいずれの攻撃性も抑制した。ここから、同じく情動的共感性であり、両者は有意に相関していながらも、個人的苦悩と共感的配慮は、抑うつ的な認知の歪みと攻撃性に対して異なる影響を及ぼすことが示された。

Davis（1980）は、共感的配慮と個人的苦悩を同じく情動的な共感性としているが、Eisenberg, Spinrad & Eggum.（2010）はこれらを別のものとして捉えている。共感性に関係した反応として、しばしば共感性から生ずるが、視点取得や他の認知的過程からのみ（あるいは部分的）に生じ得る感情的反応である同情（sympathy）を挙げ、IRIの共感的配慮尺度で測定されるものは、共感性ではなく、彼らがいう同情であろうと述べている。そして、これと、自己に焦点づけられた他者の感情の代理的な経験に対する嫌悪的な感情反応である個人的苦悩を区別し、個人的苦悩は否定的感情の強さや否定的感情の感じやす

さと正の相関があると結論づけている。さらに、Eisenberg & Eggum (2009) は、強い感情を感じやすいうえ、その感情が十分に調節されないと、人は過度の興奮によるバイアスすなわち、個人的苦悩を経験するとし、Eisenberg, Fabes, Murphy, Karbon, Maszk, Smith, & Suh (1994) や、Eisenberg, Fabes, Murphy, Karbon, Smith, & Maszk (1996) では、人が同情を感じるか個人的苦悩を感じるかの特性的な違いは、この感情を調節する能力の違いによることを示している。

共感的配慮が全てのタイプの攻撃性を抑制することから、先行研究が示している共感性の攻撃行動に対する抑制効果は、この共感的配慮の効果であると考えられる。また、共感的配慮が認知的歪曲の一つである自信欠如を抑制するのは、Eisenberg et al. (2010) が指摘しているように、共感的配慮は視点取得のような客観的認知から生じるため、そうした性質が認知的な歪みを抑制すると推測される。

個人的苦悩について、苦悩に満ちた感覚は、社会的な状況の読み取りを、攻撃行動を取りやすい方向へと誤らせるとされることから (Crick & Dodge, 1994)、個人的苦悩の強さが抑うつ的認知の歪みを促進すると考えられる。また、この個人的苦悩が関係性攻撃を促進することは、これまで指摘されてきていないが、個人的苦悩が強い者は自己の個人的苦

痛から逃れることを第一に考える (Batson, 1991) とされることから、社会的葛藤場面で抱いた苦悩を関係性攻撃によって解消しようとすることに結びつくのではないかと考えられる。

今後の課題

本研究において、抑うつを引き起こしやすい認知の歪みは、攻撃性のタイプによって異なる影響を及ぼすこと、及び個人的苦悩と共感的配慮という二つの情動的共感性とされるものは、認知のゆがみと攻撃性に対して反対の影響を及ぼすことが明らかにされた。

本研究は、自記式の質問紙を用いているため、社会的望ましさのバイアスが影響している可能性を否定できない。より客観性を高めるため、他者評価による測定を導入したり、実際の社会的葛藤場面を用いた実験的手法を用いることなどによって、本研究の成果を確認していくことが必要である。

また、本研究は一般の大学生を対象としているが、攻撃行動の問題を抱えていない一般の対象者と、攻撃性の問題を抱えている対象者が同じメカニズムによって攻撃行動を決定しているかどうかを確かめる必要がある。より攻撃性の高いと考えられる非行少年や犯罪者を対象とした研究を実施していくことが求められる。

引用文献

- Agoston, A. M., & Rudolph, K. D. (2013). Pathways from depressive symptoms to low social status. *Journal of abnormal child psychology, 41* (2), 295-308.
- Angold, A., & Costello, E. J. (1993). Depressive comorbidity in children and adolescents. *American Journal of Psychiatry, 150*, 1779-1791.
- Batson, C. D. (1991). The altruism question.
- Beck, A. T. (1976). Cognitive theory and the emotional disorders.
- Beven, J. P., O'Brien-Malone, A., & Hall, G. (2004). Using the interpersonal reactivity index to assess empathy in violent offenders. *International Journal of Forensic Psychology, 1* (2), 33-41.
- Carlo, G., Raffaelli, M., Laible, D. J., & Meyer, K. A. (1999). Why are girls less physically aggressive than boys? Personality and parenting mediators of physical aggression. *Sex Roles, 40* (9-10), 711-729.
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004)

- Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and psychopathology*, 7, 313-313.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological bulletin*, 115 (1), 74.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social - psychological adjustment. *Child development*, 66 (3), 710-722.
- Crick, N. R., & Werner, N. E. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child development*, 69 (6), 1630-1639.
- Davis, M. H. (1994). Empathy: A social psychological approach. Madison, WI.
- Davis, M. H. (1980). A multidimensional approach to individual differences in empathy.
- Davis, M. H., Hull, J. G., Young, R. D., & Warren, G. G. (1987). Emotional reactions to dramatic film stimuli: The influence of cognitive and emotional empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 126-133.
- Dodge, K. A. (1991). The structure and function of reactive and proactive aggression. In *Earlscourt Symposium on Childhood Aggression, Jun, 1988, Toronto, ON, Canada*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of personality and social psychology*, 53 (6), 1146.
- Eisenberg, N., & Eggum, N. D. (2009). Empathic responding: Sympathy and personal distress. *The social neuroscience of empathy*, 71-83.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Karbon, M., Smith, M., & Maszk, P. (1996). The relations of children's dispositional empathy-related responding to their emotionality, regulation, and social functioning. *Developmental psychology*, 32 (2), 195.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Karbon, M., Maszk, P., Smith, M., & Suh, K. (1994). The relations of emotionality and regulation to dispositional and situational empathy-related responding. *Journal of personality and social psychology*, 66 (4), 776.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987). The relation of empathy to prosocial and related behaviors. *Psychological bulletin*, 101 (1), 91.
- Eisenberg, N., Spinrad, T. L., & Eggum, N. D. (2010). Emotion-related self-regulation and its relation to children's maladjustment. *Annual review of clinical psychology*, 6, 495.
- Gibbs, J. C. (1993). Moral-cognitive interventions. *The gang intervention handbook*, 159-185.
- 濱口佳和 (2002). 攻撃性と情報処理. 山崎勝之・島井哲志 (編著). 攻撃性の行動科学. ナカニシヤ出版 40-59.
- 平木典子 (1993). アサーション・トレーニングさわやかな〈自己表現〉のために - 日本・精神技術研究所.
- 磯部美良 & 菱沼悠紀 (2007). 大学生における攻撃性と対人情報処理の関連. *パーソナリティ研究*, 15 (3), 290-300.
- Jolliffe, D., & Farrington, D. P. (2004). Empathy and offending: A systematic review and meta-analysis. *Aggression and violent behavior*, 9 (5), 441-476.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2008). 児童における3タイプの攻撃性が共感に及ぼす影響. *心理学研究*, 79 (4), 325-332.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2007). 児童におけるタイプの攻撃性が正負感情に及ぼす影響. *パーソナリティ研究*, 16 (1), 47-55.
- 川端壮康・大淵憲一 (2014). 大学生における非表出性攻撃と抑うつとの関係について：社会的情報処理モデルの立場から. *尚綱学院大学紀要*, 68, 91-101.
- 川田裕次郎・田中純夫・杉浦幸・山田泰行・今野亮・中島宣行. 中学生運動部員における反応的攻撃性と身体状況認識および認知的共感性との関連.
- Loudin, J. L., Loukas, A., & Robinson, S. (2003). Relational aggression in college students: Examining the roles of social anxiety and empathy. *Aggressive behavior*, 29 (5), 430-439.
- Lyubomirsky, S., & Nolen-Hoeksema, S. (1995). Effects of self-focused rumination on negative thinking and interpersonal problem solving. *Journal of personality and social psychology*, 69 (1), 176.
- Mehrabian, A. (1997). Relations among personality scales of aggression, violence, and empathy: validation evidence bearing on the risk of eruptive violence scale. *Aggressive behavior*, 23 (6), 433-445.
- 大淵憲一 (1993) 人を傷つける心 攻撃性の社会心理学. サイエンス社
- 大平英樹 (2005) 抑うつと情報処理. 坂本真士・丹

- 野義彦・大野裕（編著）. 抑うつ臨床心理学. 東京大学出版. 51-73.
- O'Connor, L. E., Berry, J. W., Weiss, J., & Gilbert, P. (2002). Guilt, fear, submission, and empathy in depression. *Journal of affective disorders, 71* (1), 19-27.
- 大野裕 (2010) 認知療法・認知行動療法 治療者用マニュアルガイド. 星和書店
- 越智萌子・金澤潤一郎・坂野雄二 (2012). P2-21 大学生を対象としたストレスと怒りが抑うつに与える影響 (一般演題 (ポスター), テーマ: 認知行動療法の「今」. 日本行動療法学会第38回大会), *日本行動療法学会大会発表論文集*, (38), 292-293.
- Quiggle, N. L., Garber, J., Panak, W. F., & Dodge, K. A. (1992). Social information processing in aggressive and depressed children. *Child development, 63* (6), 1305-1320.
- Renouf, A. G., & Harter, S. (1990). Low self-worth and anger as components of the depressive experience in young adolescents. *Development and Psychopathology, 2* (03), 293-310.
- 齋藤路子・沢崎達夫・今野裕之 (2008). 自己志向的完全主義と攻撃性および自己への攻撃性の関連の検討—抑うつ, ネガティブな反すうを媒介として. *パーソナリティ研究, 17* (1), 60-71.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004a). 小学生用PR攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討. *心理学研究, 75* (3), 254-261.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004b). 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響. *教育心理学研究, 52* (3), 298-309.
- 坂井明子・山崎勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響. *学校保健研究, 45* (1), 65-75.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて.
- 沢崎達夫 (2006). 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係. *目白大学心理学研究, 2*, 1-12.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元共感性尺度 (MES) の作成. *教育心理学研究, 56* (4), 487-497.
- Thoma, P., Zalewski, I., von Reventlow, H. G., Norra, C., Juckel, G., & Daum, I. (2011). Cognitive and affective empathy in depression linked to executive control. *Psychiatry research, 189* (3), 373-378.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討. *発達心理学研究, 14* (2), 136-148.
- 登張真稲 (2000). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望. *性格心理学研究, 9* (1), 36-51.
- 常岡充子・高野陽太郎 (2012). 他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制. *社会心理学研究, 27* (2), 93-100.
- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨 (2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性との関連—攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて:—攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて. *パーソナリティ研究, 18* (1), 71-73.
- 山内剛・坂野雄二 (2006). P1B-5 怒りに対するコーピングスタイルが敵意と抑うつとの関連に及ぼす影響 (ポスター発表 1B (基礎研究・ストレス・精神保健)). *日本行動療法学会大会発表論文集*, (32), 166-167.
- Zahn-Waxler, C., Cole, P. M., & Barrett, K. C. (1991). Guilt and empathy: Sex differences and implications for the development of depression.